

印象19編 —2021年2月の総評に代えて

○林 桂○

・年度の最後の締め切り月の作品である。しかし、新たな「作者」が登場し続けている。19編選んだ中にも、そうした人が入っている。また、今回は、幼年回想的な作品を多く選んでいだ。作品に出会うことで、忘れていた感覚が蘇ってきた。

●燦嗣いとり●(愛知県)

一人分の重さにも優しく沈む
産婦人科のソファ

*「一人分の重さにも優しく沈む」には、当然二人分の重さに沈む人が想起されている。新たな命を授かった妊婦も、授かりたく思いながら、治療に通院する人もいる。違うドラマが「産婦人科」のソファで交錯する。

●暮田真名●(東京都)

花守の
代わりに
貂のぬいぐるみ

*忘れられたか、落とし物のぬいぐるみだろう。それを「花守」に見立てている。メジャーな動物でなく「貂」である面白

さ。貂も狐狸の類と同じで、不思議な力を持つと信じられてきたようである。

●伊丹真●（東京都）
貸すために
消しゴムを二つ持っていた

*とっさのときに、必要な小物を持っていて貸してくれる心遣いの細やかな人がいる。そんな人の小学生時代は、きっとこんなだったのだろう。

●燦嗣いとり●（愛知県）
臍から孤独が入り込む

*ヘソは孤独の入口。なるほど。幼い日、なぜお腹にヘソがあるのか、不思議に思ったことがあるのを思い出させてくれる。ヘソを気にしている瞬間なんて、孤独に違いない。

●小島涼我●（佐賀県）
友達と一年先の話する希望に僕ら
は満ちて 新緑

*コロナ禍で、一年先の話を希望を持ってするのも難しい日常がある。青春短歌でありながら、反語的な表現にもなっているだろう。

● 梁川 梨里 ● (群馬県)

月までの火の手を上げて
桜が咲いてる

*「火の手」は、花篝のことか、あるいは桜の花の比喩なのか不明。しかし、「月までの」の虚の美しさに満ちている。

● 浅葱 ● (愛知県)

二十歳まで生きられない筈だった
母

*母は、病弱に生まれ、このように言われながら育ったのである。それを知ったのは、物心ついた後だろう。もちろん、母を思いやる気持ちの裏には、存在しなかったかもしれない自分への思いもあるだろう。

● 音無 早矢 ● (北海道)

床板の裏に秘密の入口が
あるし、何なら宇宙人だし

*秘密基地と思えば、そこが秘密基地である。床下には想像の基地が眠っている。時には、自分自身、宇宙人であることを疑い、確信することすらある。現実と非現実の境界が曖昧な幼い精神世界を蘇らせる。

● 高良真実 ● (東京都)

羽根も角もないわたしたち
剥製を見下ろす
夜の博物館に

* 剥製になった羽根を持ったり、角を持ったりする動物たち。そのように展示される特徴を持たない私達人間。しかし、それはあくまでも人間目線でもある。

● 呉田稔 ● (福岡県)

泣きたくなるくらいに尖らせて
トンボの鉛筆

* 鉛筆を削るという作業に、「泣きたくなるくらい」という思いを乗せる。小さな事だが、鉛筆を削るというのは、自分のために自分がする作業だ。決意か追い詰められた思いか。準備には何かしらの自分への視線が伴う。

● サトリ ● (東京都)

雑踏の
中には音は
一つもない
自分の匂い
だけするマスク

* コロナ禍の孤独感が「自分の匂い／だけするマスク」に貼り付いている。

●湯たんぽ●(宮崎県)

さよならをしたつもりだった

君の名を

語る誰かが蛇口をひねる

* 誰とも知らない人から、さよならをしながら、心から去らない「君」の名前が出る。しかも蛇口を捻りながらの雑談の会話の中で。その瞬間「したつもり」でいながら、「さよなら」しきれていない自分に気づく。

●ささみ雪見●(神奈川県)

歩道橋の向こう

オレンジ色の西日に

あの日の寂しさが滲むよ

おかあさん

* 「あの日の寂しさ」が何かは不明ながら、「作者」が心の中の母と対話しながら、生きていることは確か。

●亀山こうき●(千葉県)

桜東風象も象使いも眠る

* 「俳句」として佳作。塚本邦雄の「日本脱出したし 皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも」を思い出す。桜東風の中、

象も象使いも、日本脱出を思うことなく眠っている。

●まぢりこ●（埼玉県）

お金が無くて
拾った石に父の顔
書いて渡した誕生日
実家の硝子戸の中
笑ってる

* 幼いころの父への誕生日プレゼントが、いまも父に寄り添っている。

●青木雅●（埼玉県）

自販機に信州そば茶があるだけで
守られていると思える

* 「作者」は、長野県出身？ 故郷を離れての故郷との関係は、こんなところにも小さく生きている。

●暮田真名●（東京都）

サンバイザーなんか
家出の役にたたないよ

* 確かに「サンバイザー」は家出の役立たないだろう。では、何が役にたつのか？
この作品はそう問いかけている。本当に家出の役にたつものなどないのだと。

●ごんし●(愛知県)

納豆ごはんがおいしいと感じる
私はその程度の人間らしい

*「私はその程度の人間」は、自己肯定の言葉であろう。誰もこの程度の人間である。そのことを肯定してくれる。

●ごんし●(愛知県)

わけもなく悲しくなる
どうやら私は眠いらしい

*赤ん坊が眠くなるとぐずるのは、これだったのかと思わせられる。眠気は人間の最初の悲しみだったのか？